

2019年度 日本生命倫理学会年次大会
大会企画シンポジウム I
「我々は健康でなければならぬのか」 報告

健康じゃないけど生きている

土屋 貴志
(大阪市立大学)

2019/12/7

自己紹介

1961年生まれ。1990年 慶応義塾大学大学院文学研究科哲学専攻（倫理学分野）博士課程単位取得満期退学

1989-1994年 杉野女子大学・横浜国立大学・千葉大学などで非常勤講師。1994年より大阪市立大学文学部教員（現在准教授。哲学教室所属、倫理学担当）。2002-2019年 医学部「医療倫理学」兼担、2017年- 大学院共通科目「研究倫理」共担、2008-2016年 看護学研究科倫理審査委員、2008-2017年 文学研究科研究倫理審査委員。現在、人権問題研究センター兼任研究員、同研究倫理審査委員長

2005-2013年「薬害イレッサ西日本訴訟を支援する会」共同世話人、2012-13年度および2015-16年度 三田市人権のまちづくり推進委員長

専門：倫理学（道徳哲学。とくに、倫理学基礎論、医療倫理学、人権論、道徳教育論）

申し立てと乗り越えの葛藤

病気になった人、障害を負った人、事故や災害に遭った人、事件に巻き込まれた人など、しんどい人すべてにあてはまるが、

- しんどいが、しんどいことを意識していない間は、一時的に解放されている
- しんどさばかり意識していると、しんどさを乗り越えて前へ進むことができない
- でも、しんどさは、申し立てなければ、他者には理解してもらえない
- 申し立てることで、しんどさを意識し、しんどさに留まってしまうことになる

1. 自分のこと

2016年春～夏、初めての長期入院 (1)

- 4月2日(土) 自転車で帰宅中、左に傾くのでおかしいと思い、休日の当番病院を紹介してもらおうと消防に電話したら「救急車を出したほうがいい」と言われ、脳外科病院に搬送されてそのまま入院
- ★意識は全く途切れず、身体の変調を「あれよあれよ」と眺めていた
- 4月3日(日) 回復室から個室に移る
- 4月22日(金) 胃ろう (PEG) 造設
- 4月28日(木) 回復期リハビリテーション病棟に移る (個室)
- 6月初め 経口摂取可能に。週に1回程度一時帰宅始める

左側椎骨動脈解離による延髄梗塞

→ フレンベルク（延髄外側）症候群 ★は現存する症状

★左半身が重く左に傾く←左半身全体の脱力（右半身の半分しか力が出ない）

- 嚥下障害（飲み込めない→胃瘻造設→約2か月で消失→胃瘻抜去）
- しゃっくり（数日間続くことも→1か月ほどで消失）
- めまい（現在はほぼ消失）
- 嘔声（声がかすれる→現在はかなり克服）

★右脚の痺れ、左の頭部と顔面の痺れと痛み、左眼奥の痛み、左手の痺れ、右半身の痛覚と温度感覚の喪失（→現在はむずむず様感覚はあり）、左半身の筋肉と首肩の凝り

★複視（眼球筋の失調により物がダブって見える）、左目のかすみ（退院後にヘルペスによる？左眼角膜潰瘍に。現在は潰瘍は治癒するが、角膜の変形によりぼやける）

- 目を使うと症状が重くなる

2016年春～夏、初めての長期入院 (2)

- 6月23日(木) 朝昼夕 3食経口食に
- 6月24日(金) 3食通常食に。胃ろうからの注入なくなる
- 7月11日(月) 胃ろうチューブ抜去
- 7月中旬 右半身の痛覚と温度感覚が少し戻る
(くすぐったいような感覚、むずむず感)
- 7月29日(金) 退院
左半身の重み、左手と左顔面の痺れ、複視などは変わらず
- 8月1日(月) 復職 (夏期休業期間だが)

できなくなかったこと

- スポーツ（自転車乗りを含む）：左半身の力が出ずバランスが悪い、目が見えにくい（声による指導は可能）
- 日曜大工、庭の手入れ：身体がしんどい
- 観光、ショッピング：身体がしんどいので楽しむ余裕がない
- 自動車の運転：動体視が多く周囲に留意するのがひどく疲れるのに途中で休めない
- 映画鑑賞（たぶん）：めまぐるしく動く画面や大音響に耐えられない
- 恋愛（たぶん）：身体がしんどくて異性に関心を払う余裕がほとんどない（加齢による性欲減退のせいも？）

「左半身が重く左に傾く←左半身全体の脱力（右半身の半分しか力が出ない）」とはどういう事態か

左半身に体重の半分以上のおもりを常時つけているようなもの？ 例えば、

- 大きめのショルダーバッグに、10kg入りの米袋を3つ入れ(計30kg)、左肩にかける
- その状態が24時間365日ずっと続く
(実際には首から上も脱力しているので、複視、顔筋やまぶたが重い、頭が傾く、などもある)

体を支えること

- 常に身体を支えていなければならないので、起きているときは、一瞬たりとも気を抜けない（労力の8割以上を身体を支えるために使っている印象）
- だが、人と話したり、授業をしたり、本を読んだり、文章を書いたり、サッカー指導をしている間は、それに集中し、しんどさは一時的に忘れている
→ 終わった後に、よりしんどくなる

「元気になってよかったですね！」

「元気になってよかったですね！」と声をかけられたら「全然だめです」と答えている

- 仕事は一応こなしているのですが、傍目には元の身体に戻ったように見えるようだが、実際にはとてもしんどく、全然楽になっていない
- しんどいが休んでいるわけにもいかないので、通勤できる（とくに駅の階段やホームから落ちない）よう、足腰や体幹のリハビリを日々重ねている
- そのおかげで仕事も通勤もなんとかできている
- 帰宅しては「今日も生きて帰ったな」と思う

症状があっても訓練すればできることはある

- 「再びできるようになった」からといって、症状がなくなったわけではない
- 「症状がなくなれば再びできるようになる」のは真。しかし「再びできるようになったから、症状がなくなっているはず」は偽
- 症状があっても不自由でも、訓練を積みば「再びできるようになる」ことはある（→パラリンピアン）
- 症状がなくなることはもう期待できない（急性ではなく慢性の症状）なら、症状がなくなるまで休んでいても仕方ないので、しんどいけれど訓練するしかない

2. 私にとって「健康」 とは？

シンポジウムのタイトルに対する違和感

- 「健康でなければならないのか」という問い
(ないし反語) には「健康でなくてもいい」という含みがある
=健康であるか、健康でないか、を選択できることが前提
- その選択が可能なのは健康な人だけ
=いま健康でなく、これから健康になる見込みもない、治らない病気の人や症状の固定した障害者は、「健康である」ことを選択できない
= 「健康でなければならないのか」と問うのは健康な人だけ

「健康第一」「元気が一番」？

- 健康でなくなり、これから健康になる見込みもなくなってみると、「健康」は「自分のこと」ではありえない
- = 他人事、よそごとであり、どうでもいいこと
- 「健康第一」「元気が一番」と言うのも健康な人だけ。健康になれない人にとってはどうしようもない
- 「国民は、健康な生活習慣の重要性に対する関心と理解を深め、生涯にわたって、自らの健康状態を自覚するとともに、健康の増進に努めなければならない」（健康増進法第二条）と言うのも、言われるのも、健康な人たちだけ

健康でないことを恐れるのは健康だから

- 痛みや不便さがひどければ、目の前のそれらに対処することで精一杯
= そのことを嘆いたりする暇はない
 - 心身の部分的な不調に気づくのは、全体的には調子が良いから
= 心身全体の調子が悪ければ、部分的な不調にも気づかないか、気づいてもかまっていられない
- 健康でないことを恐れるのは、いま健康だからこそ

この心身で生きるしかない

- どんな人であれ、いまはこの（体感されている）心身（心と身体）で生きるしかない
- 将来健康になれない人は、おそらくこれからずっとこういう心身でやっていくしかない
- それは他に選択肢がない（どうしようもない、仕方がない）こと

「健康」は抽象的な概念

- 「健康とはどういうことか」という問いに対し、「これだ」という明確な回答は得られない
- ... 「幸せ」「幸福」という概念に類似
- 体感的な言葉ではなく、抽象的な概念
- 「気持ちいい」「快い」ということは、「健康感」や「幸福感」として健康や幸福の構成要素ではあっても、健康や幸福そのものではない

健康はどのくらいよいことか？

- 「健康（＝病気や障害がないこと）はよい」
 - 「病気や障害がなくてよかった」と言いたいだけなのでは？
 - 「病気や障害はわるい」か？
- 「健康ならばよい」か？
 - 健康なだけで幸せなわけではない（健康だが不幸な人はたくさんいる）
 - 病気や障害があれば幸せになれないわけでもない（病気や障害があるが幸せな人もたくさんいる）

自明な真理？

- 「健康」という概念はそれ自体「よい」という意味を、「病気」や「障害」という概念はそれ自体「わるい」という意味を、もともと含んでいるなら、
- 「健康はよい」「病気や障害はわるい」という命題は、述語の意味が主語に含まれている「分析的命題」であり、自明の真理
 - 功利主義において「快ないし欲求充足はよい」「苦痛ないし欲求不充足はわるい」が分析的命題なのに類似

自明な真理？

- しかし、「健康」や「病気」や「障害」という言葉でくくられるさまざまな現象を、ひとつひとつ具体的に見ていくなれば、それらの現象は一概に「よい」とも「わるい」ともいえない
 - ひとつひとつの現象の中に、よい面もわるい面も含まれている
- 「健康はよい」「病気や障害はわるい」を分析的命題として扱ってはいけない

WHOによる健康の定義

「健康とは、身体的・精神的・社会的に完全に良好な状態であり、単に疾病や虚弱ではないということではない」
(WHO憲章, 1946)

- だが「完全に良好な状態」は定めようがない
- 健康であることは、そのままでは意識されない。病気になったり障害をもったりして初めて「健康でない」ことが意識される
- つまり健康とは、やはり「健康でない (病気だ、障害がある) わけではない」ということ、「病気や障害が全然ない」ということにすぎない

L. Nordenfelt (1995) による健康の定義

「人物Aが健康であるのは、とりまく環境が標準の状況にあつて、当人の最小限の幸福にとって必要かつ十分な条件となるような目標〔最重要目標〕を充足できる場合であり、かつ、その場合に限る」

(L. Nordenfelt, *On the Nature of Health*, 2nd ed., 1995. 『健康の本質』時空出版, 2003, 邦訳p.131)

- 機能障害 (impairment) や体調不良に苦しんでいるがリハビリやトレーニングによって「最重要目標」はなんとか達成できている人は「健康」なのか？
(パラリンピアンは「健康な障害者」?)

二種類の人々

両者の境界は「何をどのように『動かす』のか」によってそれぞれ異なるが、

A 「意識しなくても頭や体を思うように動かせる」人々と

B 「意識（努力）しなければ頭や体を思うように動かせない」人々

- 私の場合突然 A から B になったが、最初から最後まで A あるいは B の場合もあるし、B から A になることもあるだろう

- A と B は共約不可能

哲学的には「その人の体感^①は他の人にはわからない」のは自明の真理。わかるならば「他の人」ではない

- 同じ人でも、A の時に B、B の時に A の体感^②は、わからない

障害を負った本人は何を考えている？

- すべてが「仕方ない」
- 発症前にどう生活していたか、体感としては思い出せない
- いまの体でやっていく（いまの体の状態に適応していく）しかない
- 自分の体は、つねに、いまの体でしかない

= 発症によって失われたものを惜しんだり悔やんだりするのは観念的なこと。

体感的・実感的なことではない

現在の心身は過去や将来の心身とは異なる

- 人は体感される心身で生きている
- 将来、いまの病気が治ったり症状が消えたりしても、その心身はいまの心身とは別のもの
=いまの心身と将来の心身は異なる
- 病気になったり障害を負ったりする前の心身も、いまの心身とは別のもの
=いまの心身と過去の心身も異なる
- （「人格」としては同一でも）心身に基づく判断は、現在と過去と未来で異なりうる
→ 将来に関する判断（事前指示など）は、その時になってみると間違っている可能性が大

健康よりも生きていることが大事

- 私自身は、健康かどうかよりも、生きているかどうかというレベル
- 健康であることよりも、生きていることが大事
- 生きていなければ、健康も不健康もない
→ 「ぴんぴん生きてころりと死にたい」 = 「病人や障害者になり周囲に迷惑をかけるなら死んだほうがよい」 = 「健康でなければ生きていても仕方がない」というように、健康と生を同じ天秤にかけるのは間違い

生きていることで精一杯

- ほんとうに生命が脅かされているときは、それに対処することで精一杯
- 「しんどい」「苦しい」と思う余裕すらない
- 「しんどい」「苦しい」と思う余裕が出てきても、本当に「しんどい」「苦しい」ときはひたすらしんどく、苦しいだけ
- 「不運」とか思う余裕はまだない

「しんどい」「つらい」「苦しい」ならば「不幸」か？

- 「つらい」「しんどい」「苦しい」のは、そのまま、そうであると認めてよい
- しかし「つらい」「しんどい」「苦しい」ということと、「不幸せ」とか「生きるに値しない」とか「死んだほうがまし」とかいうことは、全く次元が違う
- 「つらい」「しんどい」「苦しい」のは、単にそうであるというだけのこと。それを表現したからといって、「不幸」ということにはならない

健康でなければ幸せでない？

- 「しんどいですか？」 「つらいですか？」 「苦しいですか？」 という問いには、「はい」と答えてよい
- 「楽になりたいですか？」 という問いにも、「はい」と答えてよい
- しかし、だからといって「やはり健康でなければ幸せではないですね？」 という問いには、すぐに答えてはいけない
 - ★健康な人でも、誰も簡単には答えられないはず
- まず、「あなたが言う『幸せ』って、どういうことですか？」 と反問すべき

3. 生とは、死とは？

「私」が生きているとは？

- 「私」の生とは「私」という体感的な意識

(自己意識 = 意識についての意識。主に脳の働き)

- 「私」の死とは自己意識の喪失
- 自己意識が失われれば、「私」からみた、「私」にとっての世界は存在しなくなる
- 脳ができる前の胚のとき「私」はまだ生き始めておらず、「脳死状態」に陥れば「私」はもう死んでいるのかもしれない

生きていることは単なる事実

- 生きていることは「ただ生きている」こと以外の何ものでもない
- 生きていることは、ただそうであるというだけのこと
- いま生きているのは、（たまたま）生まれてきて、（たまたま）これまで死ぬような目に遭っていないからにすぎない

生きていること自体はプラスでも マイナスでもない

- 生きていること自体に、プラスの価値もマイナスの価値もない
- 生きていること自体が、それだけで、「尊い」「尊厳がある」わけでも、価値があるわけでもない
- また、生きていること自体が、それだけで、「生きるに値しない」ということもない

「ただ生きる」は「よく生きる」の 対義語ではない

- 「ただ生きるのではなく、よく生きるべき」
(ソクラテス以来の伝統的思想?)
 - だからといって「ただ生きる」ことがわるいわけではない。「ただ生きる」よりも「よく生きる」ほうがよいと比較しているだけ
 - 「よく生きる」の対義語は「わるく生きる」であり、「ただ生きる」ではない
- 「ただ生きているだけなら意味がなく死んだほうがまし」という言明は誤り
- 生きること自体は「よく（わるく）生きる」ための必要条件。生きていなければ、よく生きることもわるく生きることもありえない

生きていない事態は知り得ない

- 生きていない（生まれていない、死んでいる）事態は、私たちの体験し得ない、知り得ないこと
- 「死んでいること」は体験しえない
 - 死んでいくこと = 死ぬこと = 生きているのが終わっていくこと、は途中まで体験できる。しかし、体験し終えたときには、他の人に伝えることができなくなっている

生きている以外のありようがない

- 私たちは、生きている以外のありようをすることができない
- 死んでいる、生まれていない、という事態を体験することは不可能
- 生きているということの外側に出ることとはできない
- たとえ、死んでいるとか生まれていないとかいう事態を想像しても、その想像内容の真偽は確かめようがない

生きているのはなぜ「尊い」のか

- 生きていることは、ただそうであるということにすぎない。なのに、なぜ、生きていることは「尊い」「価値のある」ことになるのか？
- それは、私たちが生きているからであり、生きていることしか考えられないから
 - 価値を付与するのは生きている [意識ある] 主体。生きている [意識ある] 主体が全く存在しなければ、世界や宇宙のどの事象にも（プラスやマイナスの）価値は一切付かない

生命は身体の働きである

- 生物体（生きもの）と生命（生きていること）とは異なる
- 物質からなる生物体（「もの」）の働き（「こと」）が生命である
- 生物体（生きもの）がもはや働かなくなるほどに損なわれれば、生命という働きもなくなる（=死ぬ）
- 生物体が生命という働きを失った（もはや働かなくなった）ときが死である

心（精神）としての魂？

「魂とは心（精神）であり、身体とは別に存在する。よって、魂は受精（受胎）以前から存在し、身体が死んでも魂は生き続ける」という思想

...これも健康な人の幻想では？

- 身体とは別に（心ないし精神としての）魂が存在するのなら、なぜ身体の状態が魂（心、精神）に影響するのか？なぜ「健全な魂（心、精神）は健全な身体に宿る（＝健全な身体にしか宿らない）」のか？

死は知り得ない

- 死は、単に、生が存在しないこと、生きていないこと
- 生を経験しているもの（＝「私たち」すべて）にとって、自分の死は経験しようがなく、知り得ない
- 死んだときには、死んだとわからない
「死はわれわれにとって何ものででもない。
[中略] われわれが存するかぎり、死は現に存せず、死が現に存するときには、もはやわれわれは存しないからである」(エピクロス『メノイケウス宛の手紙』 124-125)

なぜ死を恐れるのか

死んだときにはもはや私たちは存在せず何も経験しないのなら、死を恐れる必要もないはず。なのに、なぜ、私たちは死を恐れるのか？

- それは、私たちが生きているから
 - 死ぬ（死んでいく）とは、生きていなくなるということ
 - 死んだ（すでに死んでいる）とは、もはや生きていないということ
- 生きている私たちににとって、生きていなくなる / 生きていないということは、自分がいなくなる / いないということであり、そのこと自体がしばしば耐えがたく、恐ろしい

生まれかた・死にかたは選べない

- 生まれかたを選ぶことはできない
 - 気づいたときには「生まれている」
- 死にかたも選ぶことはできない
 - 生体が死ぬのは物理的現象。身体を壊す「外力」で死ぬ。「自分自身の力で死ぬ」こと（厳密な意味での「自死」「自殺」）はできない
 - 死にゆくときの身体の反応は自分で制御できない
 - 本当に死ぬときには、意識のほうが先になくなっている。死んでいくことを最後まで意識し観察することはできない。いわば「いつのまにか死んだ・死んでいる」のだが、本人はもはやそのことに気づくこともない

「自死」「自殺」「自決」とは？

- 自分の身体を壊す「外力」（物理的な力）を自分で招くことはできる
（投身、縊首、服毒、自傷、...）
- それでも、死んでいく過程自体は制御できない

「死にたい」とはということか

- 「死にたい」というのは、「南極点に行ってみたい」等のように「死んでみたい」「死を経験してみたい」という意味ではありえない
←死んだら、死ぬことを経験した主体はなくなっており、後戻りもできない
- 「もうこんなのは耐えられない」「つらすぎる」「もういやだ」ということが多い
→いくらでも、そう叫んでよい。「つらい」「もういやだ」「耐えられない」と言いまくってよい *安楽死登録もその一つの表現?
- 「死にたい」とは、多くの場合、本当に「死にたい」のではない。「このつらさやしんどさから解放されたい」ということ

死んで楽になることはない

- 死そのもの（死んだこと、死んでいること）は経験できない
- 死んだときには、苦痛からの解放を経験する主体がない
- したがって「死んだら楽になれる」ということはありえない
 - 「楽」であることを経験する主体がない
 - 苦痛から解放されたことも経験できない
 - 経験できるのは生きている証拠

死は眠りでも休息でもない

- 死ぬことは「眠り」でも「休息」でもありえない
 - 眠っている時も、身心はさまざまなことを感じており、体感はある。自己意識が休んでいるだけ
 - 夢を見ていれば自己意識も活動している
- 死ねば、眠ったり休んだりする主体そのものがなくなる
- 死は「シャットダウン」であり、「スリープ」ではない

「死んだほうがよい」ということはない

1. 「とにかくこの苦しみから解放されて楽になりたい」 (現在の苦痛から逃れたい)

→ 死んでも楽になれない (楽になれるという信念は偽である)

2. 「これから来る苦しみや『生き恥をさらす』ことを回避したい」 (未来の苦痛を回避したい)

→ 予想している苦痛や「生き恥」はそれほどでもない (予想は間違っている)

- 本当に苦しいときは苦痛に対処するのに精一杯で、苦しいこと自体を悲観したりする余裕はない
- 「生き恥をさらす」のは惨めなことではなく、恐れなくていい (そうやって生きている人たちがおり、それを「恥」というのは偏見。公言するならヘイトスピーチ)

苦痛の予想にどう対処すべきか

- 非常に大きな痛みや苦しみを経験すると予想され、恐ろしくてたまらないことがある
- しかしまだ、その痛みや苦しみの体験が実際にどのようなものなのかはわかっていない
- 予想は、当たるという保証も、当たらないという保証もない。 予想が当たっていたかどうかは、経験してみても初めてわかる
- 予想が外れたなら「運がよかった」ことになる。予想通り非常に大きな苦痛を経験することになったら、その時は「つらい、苦しい」と叫べばよい
- 外れるかもしれない予想に基づいて生きるのをやめるのは早計。 恐れに従わなくてもよい

「自分の存在を消したい」

苦しみからの解放や苦しみの回避だけではなく、「自分がいなくなりたい（自分という存在をこの世界から消したい）」という理由から自殺や自死を望むことはある

...これに対しては、

- 「いなくなりたい」と思えるのも、生きて（存在して）いるからだよ。最初から[生きて]いなければ、いなくなりたいと思うこともできないんだよ

ということくらいしか言えない